

タンザニアの牧畜民ダトーガの移住後の生業に関する研究

平成 24 年入学
派遣先国：タンザニア連合共和国
宮木 和

キーワード：牧畜，適応，移住，移動性

対象とする問題の概要

乾燥地・半乾燥地の牧畜民は、広範な土地を利用し移動性を高く保つことにより生業を営んできた。しかし近年の生態環境や土地利用の変化にともない、多くの牧畜民は生業の形態や移動性を変化させている。既存研究においては、旧来から一定の領域を利用してきた牧畜民が、かつての生業形態を基礎にしながらそれを変化させ、適応を試みている例が多く報告されてきた。その一方で、旧来から利用してきた土地を離れ、生態・社会環境が異なる土地へ移住した牧畜民の生業を詳細に研究した例は、多くない。

このような牧畜民の一つに、タンザニアのダトーガが挙げられる。なかでも、旧来からタンザニア北部・現マニヤラ州のハナン山周辺に居住してきた、ダトーガの下位集団バラバイグの人びとは、過去に大規模な土地利用権の喪失を経験し、その多くがタンザニア東部、南西部、南東部などへ移住してきたといわれている。

研究目的

本研究では、旧来から生業を営んできた土地の外へ移住したバラバイグの人びとの、今日の生業活動を明らかにすることを目的とする。

牧畜民のように、自然に強く依存して生活する人びとが新たな土地へ移住する場合、生業を営むうえで多くの困難がともなうことが推測される。具体的には、

- ・気候や植生が異なる土地で家畜を飼養すること
- ・水場・放牧地の確保・管理
- ・移動性の確保
- ・従来、バラバイグ同士の地縁・血縁関係にもとづいてきた相互扶助の仕組みを、どのように保持するか、あるいは別の社会関係により補うか

などであり、これらの点から、彼らが移住先においてどのように生業活動を成り立たせてきたかを明らかにしたい。牧畜民によるホームステッドの移動は、生業における一つの戦略である場合が多いとみられることから、家畜飼養における移動性として、過去の移住も含めて調査・分析する。

フィールドワークから得られた知見について

タンザニア中央部シンギダ州マニョニ県の隣り合う二つの村、M村とK村に移入し居住するバラバイグ世帯の、①家長の過去の移住と②生業活動について、聞き取り調査（①，②）と参与観察（②）をおこなった。

①家長の過去の移住

家長 8 人に聞き取り調査をおこなった。結果は以下の通りである。

- ・家長のうちマニヤラ州出身者が 6 人と最も多かった
- ・M 村・K 村への移入時期は 2004 年以降だった
- ・家長のうち 6 人はシンギダ州あるいはドドマ州のバラバイグ居住地に住んだのち、M 村・K 村に到達した。このうち 4 人がシンギダ州の S 村を経由し、その移入時期は 1982 年から 1984 年の間だった
- ・S 村のような中継地となった居住地について、近年畑地が拡大し放牧利用できる疎林が狭いという評価が多かった
- ・いずれのホームステッドにおいても、家長の妻が一人居住していた。妻を複数もつ 2 人の家長は他州に別のホームステッドをもち、そこに一人の妻とその子をおいていた

以上より現段階では、次のような M 村・K 村への移住の一つのモデルが推測される。遅くとも 1980 年代以降、マニヤラ州のバラバイグが隣接するシンギダ州やドドマ州へと移住し、バラバイグ同士で近接して居住した。2000 年代に入り、このような居住地において土地利用圧が高まり、放牧適地が減少した。そのため放牧地を求めるバラバイグはさらにその外へと移動し、一部は M 村・K 村に到達した。

②生業活動

5 世帯を対象に聞き取り調査を、3 世帯を対象に放牧の参与観察をおこなった。下表に、M 村・K 村における生業活動についての調査結果を、1987 年のハナン県ムレル村のバラバイグ世帯を対象にした調査事例 (Lane1991) との比較とともに示す。

基本的な生業活動、現金稼得手手段に差異はみられないものの、M 村・K 村の調査世帯の方が所有農地面積が大きい、ウシ所有頭数が少ない、放牧利用する範囲が狭いなどの傾向がみられた。

表. バラバイグ世帯の生業活動

	マニヤラ州ムレル村 (Lane 1991) n=20	シンギダ州M村・K村 (本研究) n=5
生業	牧畜, 自給的農耕	牧畜, 自給的農耕
主な現金稼得手手段	家畜の売却	家畜の売却
平均世帯構成員 (人)	11.0	8.8 ^{*1}
世帯あたりの平均所 有農地面積 (ha)	1.2	2.2 ^{*1}
世帯あたりの平均ウ シ所有頭数 (頭)	62 ^{*2}	37 ^{*1,3}
周年の放牧場所	季節に応じ, 平野部, 丘陵部, 湖畔, 川辺を放牧	一年中ホームステッド周辺を放牧
ウシ給水の水場	・湖, 川, 地表水 (フリーアクセス) ・井戸 (クランの所有)	素掘りの池 (フリーアクセスあるいは個人所有) ^{*4}

^{*1} n=4, ^{*2} 仔ウシを含める, ^{*3} 乳離れした仔ウシと成ウシの合計, ^{*4} n=3



写真1. バラバイグのウシ (K村)



写真2. 水場でウシに給水する様子 (K村)



写真3. 成ウシ放牧の様子. 牧夫が、ウシが他者の畑に入らないようにしている (K村)

今後の展開・反省点

今後の課題は、言語の習得、調査対象世帯の拡大、特定の世帯でのインテンシブな調査の三点である。第一に、現時点では、今回の調査で用いたスワヒリ語の会話能力が不十分であり、さらなる学習が必要である。

第二に今回、調査対象世帯が少なく、かつ村の中心から数 km 以内に居住するバラバイグに限られていた。村の中心から離れたところに居住するバラバイグは、より近くに居住する場合とは、過去の移住、生業活動の内容、他民族との関わり方などにおいて差異があることが推測される。今後このようなより遠くに居住するバラバイグ世帯も含めて調査することにより、この地域のバラバイグの移住と生業の概況を把握したい。

第三に、各世帯での調査期間が短かった。今後特定の世帯において長期の調査をおこない、バラバイグの移住先の生業活動を彼らの生活の視点から明らかにしたい。

参考文献

Lane, C. 1991. *Alienation of Barabaig Pasture Land: Policy Implications for Pastoral Development in Tanzania*. Thesis Submitted for the Degree of Doctor of Philosophy. Brighton: University of Sussex.